

インタビュー 青柳いづみこさん

「エドガー・アラン・ポー生誕二〇〇年記念

音楽になったエドガー・アラン・ポー

『ドビュッシー《アッシャー家の崩壊》をめぐって

ドビュッシーの研究者としても知られ、ミステリについてのエッセイも書くピアニストの青柳いづみこ氏が、ドビュッシーの未完のオペラ『アッシャー家の崩壊』を中心にしたコンサートを開く。ピアノを演奏するだけでなく、「企画・構成・製作」を担う、ひとり四役。さらには、広報担当でもある。このオペラは今年生誕二百年となるポーの代表作である同名の小説を原作としたものだ。

小誌 中川右介

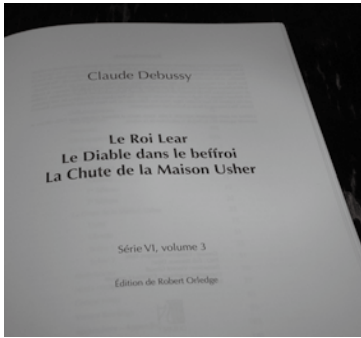
ポーとドビュッシーについての簡単な前置き

今年には著名作曲家ではメンデルスゾーンが生誕二百年だが、他にもけっこう有名な人が同じ年に生まれている。アメリカの第十六代大統領リンカーン、進化論のダーウイン、ロシア文学の巨匠ゴーゴリ、そして、作家エドガー・アラン・ポー。いずれも、何らかの歴史を変えた人物だ。

そのなかのポーは、詩人・作家として多くの作品を遺しただけでなく、探偵小説（ミステリ）というジャンルの

創始者としても知られる。そして、そのポーに心酔した作曲家がフランスのクロード・ドビュッシーなのである。

ポーは一八〇九年にアメリカのボストンでシェイクスピア劇の旅周りの役者夫婦のあいだに生まれた。両親は幼い頃に亡くなっている。十三歳で詩を書き始め、十八歳で最初の詩集を出版、軍隊生活を経験した後、雑誌の懸賞小説に応募し掲載されるようになる。二十六歳で、雑誌の編集に携わるようになる。詩人、作家、編集者となったのである。『アッシャー家の崩壊』は



音楽になったエドガー・アラン・ポー

—ドビュッシー「アッシャー家の崩壊」をめぐる
9月24日(木)午後7時開演 浜離宮朝日ホール

【企画・構成・制作】青柳いづみこ

【出演】青柳いづみこ (Pf) / 早川りさこ (Hp) / 森朱美 (Sop) / 鎌田直純 (Bar) / 根岸一郎 (Bar) / 和田ひでき (Bar) / クアルテット・エクセルシオ

ドビュッシー：弦楽四重奏曲 (1893) より第1・第2楽章 / コンクールの小品 (1905) 〈未完のオペラ《鐘楼の悪魔》による〉 / 「水の精」「カノーブ」〈『前奏曲集第2巻』(1913)より〉 / 「カスタネットの踊り子」〈「6つの古代墓碑銘」(1914)より〉

ルニエ：幻想的バラード カブレ：《赤死病の仮面》

ドビュッシー：オペラ『アッシャー家の崩壊』(1808～17・未完) (オーリッジ版・コンサート形式)

全席指定 5,000円 問合せ 朝日ホールチケットセンター
03-3267-9990

チケットぴあ、ローソンチケット、CNプレイガイド、イーブラス、東京文化会館チケットサービスでも。

一八三九年、三十歳の作品だ。史上初の探偵小説と位置づけられている『モルグ街の殺人事件』は一八四一年である。四三年にはホラー小説の元祖というべき『黒猫』を発表している。しかし、一八四九年、四十歳にして亡くなってしまう。初恋の女性との結婚、新しい雑誌の創刊の目処もつき、さあこれからという時だった。泥酔し、路上で意識不明になっているところを発見され

たが、手遅れで死んでしまったのだ。ポーはアメリカの作家だが、評価されたのはフランスが先で、一八四〇年代の中ごろには翻案という形で紹介されていた。それを読んで感銘を受けたのが、象徴派の始祖ボードレール(一八二二～六七)。ボードレールは、一八四八年から六五年までのあいだに千六百ページにも及ぶポーの怪奇小説を翻訳している。マルルメもまた、ポーを翻訳するために、イギリスに渡り英語を勉強したほど、心酔していたのである。こうしてフランス象徴派詩人たちのあいだでポーは最大のアイドルとなり、その詩人たちに心酔していたドビュッシーもポーに「はまる」。だが、あまりにポーを崇拜したために、彼はオペラ『アッシャー家の崩壊』を完成させられなかつたようでもある。

青柳氏がこの作品にどう取り組むのかを、語ってもらった。

《アッシャー家の崩壊》の創作過程

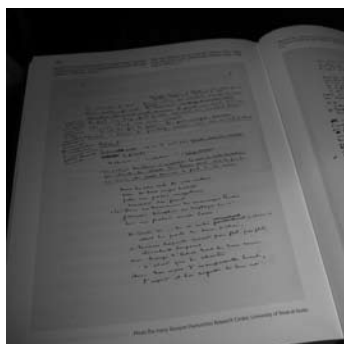
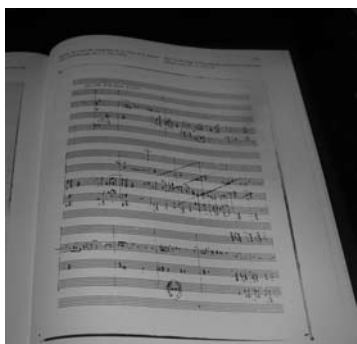
九月のコンサートメインとなるのは、ドビュッシーの未完のオペラ《アッシャー家の崩壊》です。ドビュッシーが作曲に着手するのは一九〇八年六月半ばで、七月五日には、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場の支配人とのあいだで契約も交わし、お金ももらっていたみたい。やはりポーにもとづく《鐘楼の悪魔》との抱き合わせでした。台本もドビュッシーが書いているんですが、そちらのほうは三種類も残っています。つまり、書き直したわけですね。それなのに、結局音楽は未完に終わりました。

《ペレアスとメリザンド》の初演が一九〇二年、《海》が一九〇五年。この間に、お金持ちの銀行家夫人との駆け落ち事件があり、ボヘミアン時代の友人がみんな彼のもとを離れてしまいました。そんな犠牲を払った家庭生活も身分違いでうまくいかなくなり、《アッシャー家》に着手した一九〇八年はドビュッシーが一番落ち込んでいた時期です。

《アッシャー家の崩壊》の台本の第一稿は一九〇九年六月、第二稿が一〇年六

月、最終稿は一六年九月に完成し、こちらは一幕二場の構成になっています。

ポーの原作はドッペルゲンゲルの主題を扱った『ウイリアム・ウィルソン』と、生き埋めの恐怖を語った『早すぎた埋葬』



を合体させたような感じですが。何代もつづいた古い家の末裔として残されたロデリックとマデリーヌは、鏡のように似通った双子の兄妹です。兄は、愛する妹にとり殺される恐怖に苛まれたあげく、不治の病に罹った彼女を埋葬してしまいます。ある嵐の晩、墓から脱出した妹はロデリックの部屋の扉を叩きます。

ドビュッシーはこの短篇小説をオペラ化するにあたり、プロットにかなり変更を加えています。

- ① ロデリック・アッシャーの年齢を引き上げて、容姿もポー自身に似せた。
- ② ポーが明言を避けたロデリックとマデリーヌの近親相姦関係を設定した。
- ③ 原作ではわずかしが登場しない侍医の役割を拡大し、マデリーヌに横恋慕してロデリックをさしおいて彼女を生き埋めにするという役柄に仕立てた。
- ④ 壁石に関するロデリックの妄想を具体化し、壁に向かって延々と独白させた。
- ⑤ 原作では部屋の奥を通りすぎるだけのマデリーヌ姫に、原作ではロデリックが即興で演奏することになっている『幽霊宮殿』をアリア仕立てで歌わせた。
- ⑥ 侍医の口を借りて、ロデリックを狂

人と断定した。

ドビュッシーは女性の声に憧れていたので、わざわざマデリーヌが歌う場面を入れたのではないかと思えます。また、ここがオペラでもっとも魅力的なシーンでもあります。全二場のうち、一場の音楽は清書した形で残っていますが、残念ながら二場の途中で途切れています。これをベースに数々の断片を組み合わせ、ジュアン・アジエンドープリンやロバート・オーリッジによる補筆がおこなわれました。

アジエンドープリン版は一九七九年に出版され、同年にベルリンの歌劇場で初演されまして、ドビュッシーの音楽が途切れているところはパウゼで示されたそうです。オーリッジ版は、デュランから刊行中のドビュッシー新全集の一巻として二〇〇六年に出版されました。オーリッジはさらに補完を試み、同年、ブレゲンツ音楽祭でローレンス・フォスター指揮ウィーン交響楽団、スコット・ヘンドリクス（バリトン）、ニコラス・カヴァリエ（バス）による初演を行いました。それがDVDになっています【左がそのジャケット】。でも、ドビュッシーが音



DVD《アッシャー一家の崩壊》
CAPRICCIO 93517

楽をつけていない後半部分もすまなく補筆したため、果たしてドビュッシー作と言えるかどうか、疑問が残ります。

今回、私が上演するのは、オーリッジ版のうちドビュッシーのオリジナルの部分だけです。

ドビュッシーは、『アッシャー家』の作曲を通して「音楽における苦悩への前進」をめざしました。現存する音楽を聴く限り、半音階や全音階が多用され、不気味さ、陰鬱さの表現にはある程度成功しているのですが、曖昧模糊としたドビュッシーの作曲語法には、ポーがなしとげた「効果の統一」は望むべくもなく、恐怖不足は否めません。

つまり、ドビュッシーがポーに憧れたのは、自分にもいものをポーが持っていたからで、そのポーの世界を音楽にするのは、もともと無理があつたわけですね。

ドビュッシーはワグナーを批判していましたが、切迫した場面になればなるほど、ワグナー『バルジファル』の引用と思われる箇所が目立つのも、皮肉といえは皮肉で、ドビュッシーの筆を鈍らせた原因かもしれませぬ。

《アッシャー家の崩壊》のモチーフが使われている作品

今回のコンサートでは、前半にオペラ《アッシャー家の崩壊》とかかわりの深い作品を演奏します。

《アッシャー家の崩壊》は、オーケストラのための《映像》（一九〇五）―（二）、神秘劇《聖セバスチアンの殉教》（一九一〇）、バレエ音楽《遊戯》（一九二二）、ヴァイオリンとピアノのためのソナタ（一九一七）など晩年の大作と作曲時期が重なっているし、共通するモチーフもたくさんあります。これら作曲しているときは、ドビュッシーの頭の中にはいつも《アッシャー家》がとりついていたことがわかるし、ドビュッシー自身、「アッシャー家」に住むという言い方をしています。《アッシャー家》

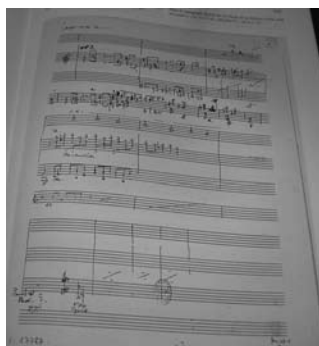
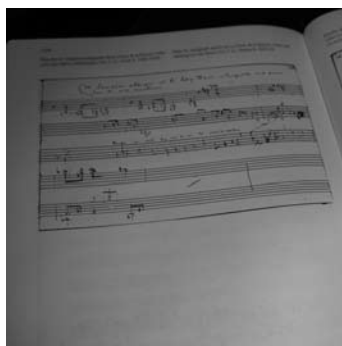
は晩年の大作を読み解くキーワードにもなります。

関連する作品は晩年ばかりではありません。一八九〇年、文芸評論家のアンドレ・シユアレスは、ロマン・ロランに宛てた手紙で、ドビュッシーが『アッシャー家の崩壊』にヒントを得て、心理学的に展開するテーマにもとづく交響曲を作曲中だ」と報告しています。この交響曲については、何も残されていないのですが、九三年八月に完成した弦楽四重奏曲の循環主題は、『アッシャー家』の主要主題に酷似しているんです。ですから、まず、これを聴いていただくと、よく覚えておいていただくと、後半に演奏する《アッシャー家》を聴かれたときに、あああれだ、と分かるはずですよ。

最初に手がかりを与えておいて、最後に種明かしをするわけで、このコンサートそのものが、ミステリ的な構成になっているわけです。

その次の「コンクールの小品」は、やはり未完に終わった《鐘楼の悪魔》からのものです。

「前奏曲集」第二巻にある《水の精》《カノープ》、そして《六つの古代墓碑銘》



からの《カस्ताネットの踊り子》の三曲は、いずれも《アッシャー家》のモチーフが使われています。《水の精》には、ロデリックのライトモチーフ、《カノープ》には墓から脱出したマデリーヌが扉を叩くときの音楽、《カस्ताネットの踊

り子》にはマデリーヌのモチーフといった具合です。これらは、ちよつと説明を加えながら弾くことになると思います。

ドビュッシー以外の作曲家の ポー作品をもとにした音楽

ポー作品の音楽化は、ドビュッシーだけでなく、さまざまな作曲が取り組んでいます。ロシアのラフマニノフの《鐘》もそのひとつです。これは合唱交響曲という大作なので、今回はとりあげられませんが、ドビュッシーともかかわりがあったフランスの二人の作曲家の作品、ハーブがらみの曲を、早川りさこさんに演奏していただきます。

アンリエット・ルニエ《幻想的バラード》はポーの『告げ口心臓』にヒントを得た作品で、鋭い付点をもつ減七のモチーフが聴き手を落ち着かない気分に陥れ、これまでに書かれたハーブのレパートリーの中でも最難曲といわれる曲です。ルニエは、十一歳でパリ音楽院を一等賞で卒業したほどのすぐれたハーブ奏者でした。ドビュッシーの《神聖な舞曲と世俗的な舞曲》(一九〇四)の初演

者でもあります。

その次は、アンドレ・カブレ(一八七八〜一九二五)の『赤死病の仮面』(ハーブと弦楽四重奏のための)です。グリッサンドやハーモニックスの技法を駆使して神秘的な雰囲気演出し、死に神がはいりこんでくるシーンではハーブの横木を叩く特殊奏法もおりませて、ポー文学中でももっとも色彩豊かな物語を巧みに音楽化しています。

カブレは、ドビュッシー晩年の協力者で、編曲やオーケストレーションを多く手がけ、ドビュッシー作品の指揮者でもあった人です。ドビュッシーも、カブレについて「彼は音響的な雰囲気を見いだすことを知っているし、感受性にも恵まれ、構築のセンスももっている」と激賞していました。

そんなに親しい関係だったのに、一九〇九年七月三日にパリで《赤死病の仮面》が初演されたことについて、ドビュッシーは何もコメントしていないんですよ。調べてみると、この日ドビュッシーはパリ音楽院の音楽の修了試験の審査員をつとめていたので、初演が同じ時間帯だったとしたら、聴きたくても聴き

に行けなかったのかもかもしれませんが。このあたり、想像してみると面白いですね。もしかすると、ジェラシーだったりして。ちよつとドビュッシーが《アッシャー家》にとりくんできた時期と重なるし、カプリにはいつも「作曲がうまくいかないとグチをこぼしていたのですから」。

《春の祭典》が ポー作品の音楽化を途絶えさせた？

ドビュッシーが亡くなったのは一九一八年ですが、その前年まで、《アッシャー家の崩壊》に取り組んでいました。その他のポー関連の作品は、一九一三年を境にぱったりとだえてしまいます。ストラヴィンスキー《春の祭典》初演という大事件が起きた年ですね。御存知のように、以後のクラシック音楽は二つの方向に分裂します。シエーンベルクをはじめとする新ウィーン楽派は無調や二重技法に向かい、コクトー率いるフランス六人組は、ポーが神格化されていた一九世紀末デカダンスを否定し、一八世紀に回帰して冗談音楽にシフトするわけですね。

さらに、第二次世界大戦以降の作曲界は実験合戦の様相を呈し、ポーのようなゴシック・ロマン系がはいりこむ隙間はなかったわけです。

私以外の出演者についてご紹介しますと、マデリーヌを歌うソプラノの森朱美さんは、2004年ブラハ国立歌劇場でヴィオレッタを歌った方。透明な歌声と美しい容姿でこの役にぴったりです。ロデリック（バリトン）の鎌田直純さんは、ジャン・フルネが振ったときの《ペレアスとメリザンド》のペレアスです。悩めるロデリックを切々と演じます。侍医の根岸一郎さんは、武蔵野音大を卒業した後、早稲田大学文学部で学び、パリ第四大学で日本の落語がフランス文学に与えた影響を研究した方です。和田ひできさんも、早稲田の哲学科を卒業したあとオペラ界にはいり、ドビュッシーの未完のオペラ《ロドリグとシメーヌ》にも出演されています。この方々と役づくりについて議論していると、オペラ歌手というよりは演劇青年たちと一緒にいたいので、とても楽しいです。

《アッシャー家の崩壊》は字幕付で上演します。未完ですが、最後のページはスケッチが残っていて、ジャンジャンという感じで派手に終わるので、聴いていて、「これで終わりなの？」ということにはならないと思います。ちゃんと最終しますので、安心してください。

インタビューを終えて

ドビュッシーがメトと契約したのは一九〇八年だという。マラーがウィーン国立歌劇場と決別してメトで指揮するのが、一九〇七年から一九〇九年まで。マラーを追い出すかたちになったのが、トスカニーニだ。だから、もし契約どおりにドビュッシーが完成させていたら、《アッシャー家の崩壊》はマラーかトスカニーニが初演を指揮した可能性もあったわけだ。

DVDは二〇〇六年にリリースされたのだが、日本国内では現在入手が困難。EMIのCDも同じ。ドビュッシー作品のなかでも《アッシャー家》はコンサートでは滅多に演奏されないだろうから、貴重な機会となりそうだ。

参考文献

- 『エドガー・アラン・ポーの世紀』（八木敏雄・巽孝之編、研究社）収録の青柳いづみこ「音楽になったエドガー・ポー〜〜クロード・ドビュッシーとフランス近代を中心にをともに」
『ドビュッシー 想念のエクトプラズム』（青柳いづみこ著、中公文庫）